

示いただいた茶野木立夫氏にお礼申し上げます。

文 献

- 1) English Patent, 356 Feb. 12, (1856)
- 2) In the District Court of the United States for Eastern District of Michigan Southern Division (Civil Action No. 16, 900, Apr. 9, 1965)
- 3) Deutsches Reichspatent, DRP 735196 (1939 年 5 月 24 日出願)
- 4) C. V. SCHWARZ: Radex-Rundschau, (1949) Heft 2, p. 33
- 5) R. DURRER, H. HELLBRÜGGE, and H. RICHTER-BROHM: Stahl u. Eisen, 85 (1965), P. 1751
- 6) VÖEST 編: Drei Jahre LD-Stahl, VÖEST 1953-1956, VÖEST (Linz-Donaw) (1956)
- 7) R. ROTH, H. KELLER: Stahl u. Eisen, 86 (1966) p. 851
- 8) R. DURRER, H. HELLBRÜGGE, and H. RICHTER-BROHM: stahl u. Eisen, 86 (1966), P. 980
- 9) K. W. LU: 雀部実への私信, 1980 年 9 月 2 日
- 10) G. FEGEL (BOT): 雀部実への私信, 1979 年 2 月 14 日
- 11) 宮下芳雄: 日本鉄鋼協会科学技術史委員会製鋼 WG 報告集, 近刊予定
- 12) 茶野木立夫: 特許管理, 23 (1973), p. 27

~~~~~  
書 評  
~~~~~

実 験 計 画 法

朝 木 善次郎 著

(共立出版社(共立全書), B 6 判, 233 頁, 定価 1800 円)

すべての工業的研究に共通かもしれないが、金属材料を対象としている者は、特にその結果に及ぼす因子があまりにも多いことに常に悩まされている。この問題の解決に実験計画法が有益なことは誰しも気付くのであるが、当面する課題に適用するとなると二の足をふむ場合がほとんどである。その第一の理由は実験計画法のバイブルである“The Design of Experiment”が数学者 Fisher の農事試験場における研究の論理化の結果として書かれたもので、実験計画法の解説書は常に農業実験をその説明に用いており、工学者、特に金属材料研究者の取り扱う対象と対応がつけ難い点である。本書の著者は京都大学で冶金学を専攻し、冶金反応論の専門家で、我々にとって身近な実験計画法の実践者である。本書の 9 章の題名はそれぞれ「実験計画法の考え方と実験の配置」「統計的推論の基礎」「完全無作為化法」「乱塊法」「ラテン方格法」「分割法」「直交表による実験」「回帰分析」「実験施行上の諸問題」となっている。第二章の数理統計学の基礎は入門者に便利だけでなく、完備した数値表と共に問題計画立案の助けとなっている。例題も期待通り類書に比して金属工学者に身近かであり、各章の解析も親切である。欲をいえば入門書としてはもう少し多く金属関係の例題を取り入れてほしかったし、実用書としては大型材料試験を考慮して不完全ブロックや部分つり合ブロック計画についても言及して欲しかった。それらの点を考慮しても本書は実験計画法の入門書を探している材料工学研究者にとっては最適の書である。

(布村成具)